

ユーザー事例紹介

「MicroGDS・Piranesi Forum'99」にてご講演頂いた事例をご紹介します。

大規模プロジェクトにおける MicroGDS の利用事例 渋谷マークシティプロジェクト(渋谷道玄坂1丁目開発計画)の例

株式会社東急設計コンサルタント 伊藤 雅彦 氏

東急設計コンサルタントでは、1988年にW/S版のGDSを導入し、その後1994年よりMicroGDSを導入。現在、設計部でPro13本、Compact20本を使用している。

渋谷マークシティプロジェクトは、京王井の頭線渋谷駅を中心に、ホテル、オフィス、店舗、営団地下鉄車庫、駐車場を含む高層ビル2棟が建設される大規模なプロジェクトである。東急設計コンサルタントは、地下2階、地上25階のホテル棟の設計を担当し、現場事務所ではMicroGDS Proを使用している。今回は、マルチユーザー機能の特徴を十分活用し、大量の図面を作成、管理している様子を発表して頂いた。

2000年春オープン予定のこのプロジェクトの計画は10年程前から始まり、当初はW/S版GDSが使用されていた。1997年現場事務所が開設された時、W/S版GDSのデータをMicroGDSへ移植。その後、データは日々追加修正され、1999年11月時点では、2,000枚のレイヤ、900のWNDファイルが50のフォルダに分類管理されている。これらの大量のデータを効率良く管理するために、様々な工夫がなされている。

① データの管理

ファイル、レイヤ等のデータ名は、多少長くなっても多くの情報を盛り込んだ分かりやすい名称を付けている。例えば、ファイル名は「PLAN1」などの通常の図面名に加え、確認申請図、防災図など図面の用途も明記し、また、同じ用途の図面でも異なる案を作成するような場合は、さらに日付なども入れている。

② データの共有

同じデータはコピーせず、共有する。例えば、確認申請図と契約図、防災図等で各階平面図のレイヤを共有することで、図面間の齟齬をなくし、かつデータ容量の低減を図ることができる。レイヤは、各フェーズ毎にレイヤ表示色、オブジェクト包含リスト、線種・文字種の置き換え機能などで表現を変えられるので、1枚のレイヤを用途に応じ表現を変えて複数の図面に利用できる。また、フォト機能を利用し、ウィンドウの一部を共有する方法もある。例えば、色の塗り分けをした場合の凡例を作成し、フォトで複数の図面上に配置する。凡例に変更があった場合は、元のウィンドウで修正すれば、その結果はすべての参照先に反映される。データの共有は、データ量の低減のみならず、データの一元性保持、及



(株)東急設計コンサルタント
伊藤 雅彦氏



<立面図>

び作業効率向上の有効な手段と言える。

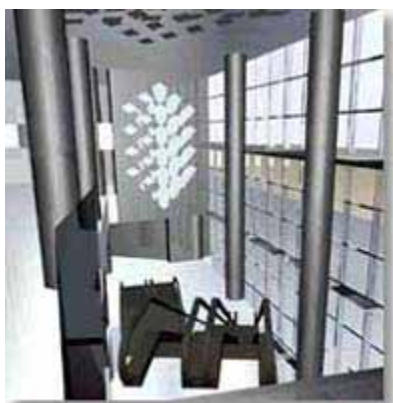
立面図などのプレゼンテーション図面では、MicroGDS のきめ細やかな線種機能とフェーズの機能が駆使されている。(右上図及び右図)

また、プロジェクトデータは、安全のため毎日MO ディスクにバックアップが取られている。さらに、データは日々更新されるため、各種申請図等提出時には、その時点のデータを必ず別途保管している。



<立面部分拡大図>

● MicroGDS により作成したパース



特別なカスタマイズをせずに、MicroGDS 本来の機能だけで、これだけのデータを作成管理している様子は、多くの参加者にとって、大変参考になったようである。最後に現状のシステムに対する貴重な提言を頂いたが、早速、開発元へアクションリクエストという形で送られた。